



『ヘビノネゴザ（蛇の寝莫産）』

衣川 実介

聞き慣れない言葉でごめんなさい。銀や銅鉱山のことを書き綴ってきましたが、実は自分自身疑問に思っていることがあります。

『その鉱山はいつ誰が見つけたの?』こんな質問に対し、ほとんどの資料が『〇〇時代のころに開発されたと伝え聞く』などという曖昧な記述です。

いつ、誰が、どんな風に調査し、この鉱山を見つけたの?明快に書かれた資料はほとんど見つかりません。江戸時代に書かれた鉱山書の代表的著作「山相秘録（さんそうひろく）」には、鉱山を発見する方法を以下のように書き始めています。



ヘビノネゴザ

およそ山相を観るには、まずその山々のうち最も高い山を東にして、北の方角より観るのが昔からの決まりである。月は5・6・7月がよく、日は雨上がりがよい。暑い日の雨上がりに、南の山を遠くから観れば、雲や霧が消えて、山々の色がまるで酒がさめたような色になる。この時、一番高い山から周辺の低い山までめぐり連なった山をじっくり観察すると、青緑色の中に霞光瑞靄を（かこうずいあい=宝から発する精气）発して、他の山と異なる所があるならば、それは諸金属を含んだ山の姿である。この方法を最初遠見法という。



黄銅鉱

こう書かれています。そうして後々詳しく書かれていますのですが、こんな文学的な表現の文章から、鉱山を発見できるのでしょうか?私には不可能に思えます。

ヘビノネゴザ（蛇の寝莫産）は、しだ植物で昔は金属鉱床の指標植物として利用されていました。鉱脈の付近に自生することから、カナヤマシダや金山草、龍のヒゲなど色々な名前と呼ばれています。1897年（明治30年）、三宅驥一（みやけきいち）氏は、生野銀山の「へびのねござト鉱質トノ関係」の報告文の中で「余本年夏期休業ニ際シ帰国セントスルヤ牧野氏余ニ託シテ曰ク、君ガ国ハ但馬ナレバ帰郷ノ途次必ズ生野銀山過クベシ彼ノ地ニ一種の羊歯、かなやました（一名ゆのみねしだ）ナルモノアリ銀山ノ鉱石ノ出ル個所ニハ必ズ生ズレバ坑夫ハ此草ノ生ズル所ニハ鉱石在リト信ジイルト聞ク君乞フ此ヲ採取シテ持帰レト」と、植物学者、牧野富太郎（まきのとみたろう）氏から、かなやました採取の依頼を受けています。三宅氏は、旅宿の主人、畑を耕す農夫、坑夫にも、かなやましたが生育している場所を聞き、生野銀山の周辺を調べたところ、かなやましたは、残念ながら、特別なシダではなく、自分が先年この地で採取していた、へびのねござであることを確認し、「へびのねござト鉱質ト密ノ関係アルコト」と、簡単に報告しています。

三宅 驥一（みやけ きいち、1876年11月11日生）は、兵庫県出身の植物学者。理学博士（東京帝国大学）。  
牧野 富太郎（まきの とみたろう、1862年5月22日生）は、日本の植物学者。高知県高岡郡佐川町出身。

参考資料

ふるさと学習誌「石見銀山～鉱山の技術と科学～」 太田市外2町広域行政組合 平成12年 3月12日  
三宅驥一（みやけきいち） 生野銀山の「へびのねござト鉱質トノ関係」（ウィキペディア）

「鉄のふしぎ博物館」

来て!見て!ふれて! ふしぎ体感

鉄を見る目がかかりますよ。  
ぜひお越しください。



製銅カス  
磁石にツイタ